

科学と科学主義と宗教を理解する



Faraday
Papers

イアン・ハッチンソン

要旨

科学主義とは、自然科学の方法が真の知識を見出す唯一の、あるいは少なくとも抜きんでて優れた道であると信じる信念のことである。この信念は、しばしば暗黙のうちに採用され、科学と宗教の関係について誤解を生じさせる中心的要因となっている。科学主義を否認することは、科学を拒否することなくできる。人間は科学的知識以外にも多くの知識を持っており、科学はそれ自体それらの知識に依存している。それゆえ、宗教的信念が科学的に実証されなくとも、だからといって、宗教的知識の存在が否定されるわけではない。

科学と科学主義

「到達可能な知識はすべて、科学的方法によって到達されるに違いなく、科学が発見できないものは、人類には知り得ない」¹。このように、哲学者バートランド・ラッセルは1935年に書いた。彼はこれによって、今日「科学主義」と言われる信念を簡潔に表現している²。科学主義的態度は、それ以前の200年間で一般的になってきていたが、科学主義という言葉は事実上当時はまだ知られておらず、ノーベル賞受賞経済学者のフリードリヒ・ハイエクが1952年の著書³で、社会学におけるこの視点の不毛さを非難した時に衝撃的に知名度を上

げた。その結果、この語は否定的響きを持ち、そのためもっともながら、科学主義的見方をする人々は、めったに自分たちの見解を科学主義と呼んだり、それを正当化しようとしたりはしない。科学主義はむしろ、暗黙の前提であることが多い。

到達可能な知識はすべて、科学的方法によって到達されるに違いなく、科学が発見できないものは、人類には知り得ない

科学主義は、反宗教的なさまざまな哲学的立場、たとえば、神的行为者などいないという自然主義的主張、唯物主義、存在論的還元主義などの基調をなす。しかし、ラッセルの要

約によれば、科学主義とは、第一に、何を知識とみなし、それはいかにして獲得すべきかにかかわる。それゆえ、科学主義とは、少なくとももともとは、知識の哲学(一つの認識論的立場)であり、われわれは科学を通してのみ真の知識を得るのであり、物質界以外には何も存在しないという、存在の哲学(一つの存在論的立場)ではないのである。しかし、認識論的な意見は、政策や社会、そして道徳にまで入り込む幅広く、大きな影響力を持つ態度にまで拡大している。そして、反宗教的な視点は、しばしば科学主義的が暗黙に前提され採

¹ *Religion and Science* (Thornton Butterworth, London, 1935), p243.

² Ian Hutchinson *Monopolizing Knowledge: a scientist refutes religion- denying reason-destroying scientism*

(Fias Publishing, 2011)などを参照.

³ Friedrich Hayek, *The Counter-Revolution of Science* (1952, Reissued 1980, Liberty Fund, Carmel Indiana).

扱われていることから来ている。それゆえ、科学と科学主義を区別することは、科学と宗教の関係を理解する上で極めて重要である。

この議論で難しいのは一つに、科学とは何を意味するのか、ということについて混乱があることだ。英語では、今日、ほとんどの人が「科学」という語を修飾語なしに、自然科学、つまり、「自然哲学」と呼ばれていたものの意味で使っている。この意味では、物理学、化学、生物学、地質学、宇宙論、古生物学などの分野を包括する。しかし、ラテン語が知的活動の主要言語であった初期の世紀には、「科学」に相当する語(サイエンス[訳注:ラテン語のサイエンティアからの英語])はそれとは異なる意味だった。アリストテレスやアキナスなどの偉大な哲学者たちの教導に従って、「科学」とは、いかなる分野においても、長い研究、特に論理的な実証によって知識を深める、美德あるいは思考の習性と考えられており、そこから、この科学(サイエンス)の実践によって獲得されるあらゆる体系の知識もまた科学(サイエンス)と言われていた。もし今日の科学が中世のサイエンティア、つまりいかなる分野においても得られる一連の体系的な知識への道を意味するならば、科学的見解はほとんど同語反復、つまり定義上正しいことになるであろう。現代でも大学の学部名には、「政治科学」「社会科学」などという、自然科学とは無縁のものがある。これらの名称は、「科学」がサイエンティアを意味する場合のみ適切である。誤解のよくある原因は、科学という言葉の異なる意味を認識せずに混同してしまうこと、つまり自然科学とサイエンティアを混同してしまうことにある。科学と宗教の関係についての厄介な問題のほとんどは自然科学に関するものなので、本論では以後、科学という語を自然科学の意味で用いよう。神学が自然科学で

私は、自然科学を定義する特徴として、(1)再現可能性、(2)表現の曖昧さのない明確さ、を挙げる

あると想定しても無意味で、意味がない。(歴史的に)神学が「科学(サイエンス)の女王」と呼ばれたとき、それは「サイエンティアの女王」という意味だった。神学はもはや女王ではないかもしれないし、自然科学だったことは一度もないが、確かに今でもサイエンティアとみなしうる。ほとんどの人は、科学(自然科学)の本質をなす特徴に気づいている。たとえば、体系的な実験と観察、結果の記録と分析、そこから自然界の振る舞いを支配する一般原則—いわ

ゆる自然法則—を定式化し、それらの法則による結果を解明することなどだ。科学的な実験や観察が有用であるためには、再現可能でなければならない。科学は、世界が再現可能な振る舞いをする仕方に焦点をしばっている。そして、再現可能であることを知るためには、結果に曖昧さが残ってはならない。そうでなければ、再現可能か

どうかわからないからだ。私たちは、支えられていない物体が約 9.8 m/s^2 の加速度で地上に落下することを観測している。これは、地球上の誰であれ、どこにいようと、試してみれば実証できる⁵。これは重力に適用された科学であり、再現性があり(いつ物体を落とすかにかかわらず)、明確である(測定単位で 9.8 m/s^2 が何を意味するか分かれば)。私は、自然科学を定義する特徴として、(1)再現可能性、(2)表現の曖昧さのない明確さ、を挙げる⁶。ここでいう再現可能性とは実験室での実験で任意に繰り返されることだけに限らない。天文学、古生物学、地質学、植物学など、実験では制御できない物理的事象や標本の観察では、異なる時間や場所で、同様の現象を調査する機会を複数もつことで再現可能性を得ている。過去の科学的調査、つまり自然史の調査も同様に、今日の再現可能な振る舞い(自然法則)が過去にも当てはまるという仮定に依存し、また実際、再現可能な観察に依存している。これは、ビッグバンのような特殊な事象に

⁴ Peter Harrison *The Territories of Science and Religion* (University of Chicago Press, 2015)など参照。

⁵ ただし、重力が真に支配的な力である条件の所を選ぶこと。

⁶ 自然科学のこれらの特徴はChapters 2 and 3 of

Monopolizing Knowledge 2-3章に大きな紙面を割いて述べられている。私が本論で「科学」という語で意味することを明確にしているものとして、これらの特徴の普遍性に懐疑的な方は、これを読むことを勧める。

についても当てはまり、その影響(たとえば、マイクロ波背景や元素の相対的存在量)は今日でも繰り返し観測することが可能である。化石に残る生物の進化の記録や地層の解釈は、その観察上の再現可能性を、複数の類似した例の発見と利用可能性によって得ているのであって、制御された任意の再現によってではない。

現代の自然科学は自然を研究する学問であるが、自然とは何かという厄介な問いに特定の方法で解答している⁷。科学革命の最も重要な展開の1つは、物体が落ちるのは(例えば)本来備わった目的論的な「性質」のためであるというアリストテレス的説明を捨て、その代わりに、明確に測定できる特性という観点から、物体の振る舞いの再現可能性を研究するようになったことである。それ以来、科学は再現可能性と明瞭性に固執することで、自然界の理解において多大な成功を収めてきた。科学論文は、実験や数学の方法の提示において、厳格な基準を満たす明確さを求められ、意味が不鮮明で曖昧だったり、結果が明確な記録によって立証されていなかったりすれば却下される。また、報告された結果がさらなる調査で、(予想された不確実性を超えて)再現可能性に欠けることが判明した場合⁸、疑わしいとされ、結局信用を失う。私自身、プロの科学者として、これらの点には実践上注意している。宇宙がいかに再現可能かを研究するには、つまり自然を研究するには、このような方法の価値は証明されている。しかし私は、これが知識のすべての側面に適用できる方法ではないことも気づいている。これに対して、18世紀のますます多くの啓蒙主義の思想家たちが確信し、そして19世紀の実証主義、20世紀の論理実証主義が率直にはっきり主張したのは、科学の方法が漏れなくあらゆるものに適用されるということだった。実証主義の主張で

は、どのようなテーマについても、原始的な科学以前の知識はしかるべき科学的知識に成長する必要があり、時間とビジョンがあれば、そうなるか、そうならなければ知識ではなくナンセンスだとして捨てられねばならない。その視点が科学主義である。それはつまり、「科学があらゆる真の知識のすべてである」と言うことである。

科学主義への反動

今日、学術的にしっかりとした哲学的意見の風潮では、大方、実証主義は行き詰まると見られている。おそらく実証主義の最大の論理的弱点は、明白な自己矛盾にある。もし、私たちが本当に知りうることはすべて科学によって発見されなければならないとしたら、どうやってそのことを知ることができるのだろうか。科学主義は科学的に証明されたものではなく、科学が発見したことでもない。したがって、もし科学主義が真実であるならば、私たちはそれを知らないし、知ることもできないのだ。さらに科学主義は、ポストモダニズムと呼ばれる知的運動の中で、強い批判を浴びるようになった。科学主義の影響のもとで、歴史学、社会学、哲学、言語学、そして文学まで、人間のさまざまな領域の学者たちは、自分たちの学問分野を科学にしようとする奮闘し、たとえば歴史研究において、「重力の法則や化学的親和性と同じほどに受け入れられ、考慮に入れられる法則……」がまもなく得られるだろうと提案していた⁹。しかし20世紀半ば、こうした野心の挫折がますます明らかになると、特に文学研究や哲学において、それを誘発した科学主義に対する反動が起きた。このポストモダンの反動で強調されたのは、「語り」が真の知識を表し、伝えることができること、科学だけが何かを知るための唯一の方法ではないということだ¹⁰。これは、科学主義の独占的主張に対する好ま

⁷ 王立学会の創立者のひとり Robert Boyle は、一冊まるごとの本を書いている。 *A Free Inquiry into the Vulgarly Received Notion of Nature* である。

doi:10.1017/CBO9781139166836参照。

⁸ 明確さとは、実験的数値の正確さのことではなく、実験結果を我々がどれほど正確と考えているかを示しているという意味である。

⁹ Edward P. Cheyney, *Law in History*, http://www.historians.org/info/AHA_History/epcheyney.htm, American Historical Association at Columbus, 1923年12月27日の演説。 *American Historical Review* 29:2 (January 1924): 231–48.

¹⁰ *The Postmodern Condition: A Report on Knowledge*, Jean-

しい矯正手段である。しかし残念なことに、ポストモダニストの批評はしばしば科学と科学主義を区別できず、科学そのものを攻撃している。より極端な批判をする者たちは、自然界の再現可能な振る舞いを記述する場合でさえ、科学理論は当該データの社会的、歴史学的分析が適切でないのと同様、適切ではない、とほのめかすのだ。科学は確かに、言語など、科学以外の多くの人間の技能や知識に依存しており、科学の実践や歴史的発展には人間や社会の影響がある。しかし、社会が異なれば、確立された科学理論の内容も異なるだろうというポストモダンの推測は、ほとんどの自然科学者には不合理とみなされる。科学者たちは、誰にとっても等しく真である、宇宙に関する信頼できる真理を発見していると考えており、私もそう考えるのは正しいと思う¹¹。

それでもなお、過去数十年の間、科学哲学の学者たちの間に浸透していた見方では、いかなる知識が科学的であり、いかなる知識が科学的でないかを判断するための明確な「科学的方法」やその他の基準は存在せず、存在したこともないと考えられていた¹²。科学と非科学の間の線引きをどこでするかという「境界線問題」を解決することが哲学的にできないことは、科学者を悩ませてはいない。科学者は発見の方法を理論的に処方してもらう必要はないようなのだ。また、(それほど一貫していないが)これは、科学史・科学哲学の分野を崩壊させる要因になったようにも見えない。この分野の学者や学術誌は、この学問が何を意味するのかを自分たちが知っており、それは圧倒的に本論で提示した意味での科学のことだと示し続けている。科学主

このポストモダンの反動で強調されたのは、「語り」が真の知識を表し、伝えることができること、科学だけが何かを知るための唯一の方法ではないということだ

義を支持する人にとっては、科学と非科学の線引きは、知識と迷信、あるいは分別とナンセンスの間の線引きでさえある。失敗したのはこの線引きであり、それも驚くにあたらない。科学主義はハードルを上げ、境界線に、科学主義自体にふさわしくない、自分が耐えられないような重要性を与えてしまったからだ。

線引きの明らかな難しさにもかかわらず、科学的知識には何か特別なところがある。科学は、顕著に信頼できる知識を与えてくれる。それは、まさに、科学が自らの特質として、世界の再現可能な側面に焦点を当てていることによる。そこから生まれる技術の生の力は(良くも悪くも)否定しようがない。再現可能性こそが技術に最も必要とされるものだからだ。科学が科学自体の領域で成功していることを否定する科学主義批判は、空虚で説得力がない。したがって、科学と科学主義を区別することは、科学は非常に簡潔さ、説得力、実用的な重要性を備えた知識を与えてくれはするが、人が知りうることをすべて網羅しているわけではなく、人々が最も重要と考える深い超越的な問題に答えることは、科学にはできないのだという認識を回復するのに不可欠である。

非-科学的な知識

歴史学は、注意深く規律ある研究から生まれる真の知識を持つ分野でありながら自然科学とは全く異なる一例である。歴史は再現が不可能であり、実際、歴史の中で最も注目される出来事は概して、通常とはもっとも異なり再現可能性に乏しい。よって歴史は、決してあらゆる知識が世界の再現可能な側面に関するわけではないということを実証している。歴史はまた、政治的配慮、感情、価値、正義など、

François Lyotard (1979) は広く、ポストモダニズムの明白な表現と考えられている。

¹¹ Roger Trigg, in Faraday Paper number 2, は、ポストモダニズムがこのような「偉大な語り」をすべて拒絶していると指摘している。この拒絶はLyotardによって、科学と科学主義の区別なく明らかに表されている。宗教は怪しいとされるもう一つの「偉大な語り」である。わたしは科学につ

いてもキリスト教についてもこの拒絶には同意できない。

¹² Paul Feyerabend, *Against Method* (NLB, London, 1975) は、この見方の採択において非常に影響力をもつ。私が再現可能性と明確性を近代科学の特徴としたのは、線引きの包括的な回答としてではなく、実際の特徴の一部としてである。これは *Monopolizing Knowledge* 4章に詳しく述べてある。

科学が要求する明確さをもっては表現できない微妙であいまいな要素に関するものでもある。微妙で漠然とした要素についての理解や知識は、自然の法則とは異なるが、自然法則と同じほどに重要でありうる。

また、言語学、社会学、文学、経済学、倫理学、哲学など、他の人文科学や社会科学の分野についても、程度の差こそあれ同じことが言える。これらが結局は科学に還元され、植物学や冶金学、天文学と同じような方法で研究されるだろうと考えるのは、これらの本当の性質を無視することだ。科学以外の学問は、それぞれの関心対象の性質にふさわしい独自の的方法論に従っており、そうすることによって知識に貢献している。その知識はしばしば予測力に関して劣ったり曖昧だったりして、確認することがより困難であるが、それは対象がそういうものだからなのだ。数学や科学はしばしば、知的ハードルが高い難しい学問と思われるが、実のところ、科学は、世界の明確で再現可能な側面に焦点を絞ることによって世界の容易な側面を研究対象に選んでいると言える。世界の測定不可能で微妙な、再現不可能な側面は、ある意味で、科学に比べて、一貫した知識体系にすることが非常に困難で、その面についての知識は概して科学ほど信頼できる予測力や制御力をもたらず、専門家のコンセンサスも得られていない。

宗教に関して、メディアのコメンテーターたちは習慣的に、科学に基づく信念や行動と信仰に基づく信念や行動を対比させ、あたかも科学が知識であり、宗教的信仰が、推測、迷信、希望的観測、あるいはとにかく根拠のない信念であるかのように語ってきた。しかし、より正確に対比をなすのは、科学と非科学である。宗教の問題の独自性は、決して、科学でアプローチできないという点にはない。宗教的な信条は、歴史の問題と同じように、証拠、思慮深い弁証、有用性、個人的な経験などの観点から、理性的に議論できる。しかし、このどちらの分野も、証拠は科学的再現可能性や明確性をもつ実験や観察のような形をとることは期待できない。むしろ、法的事件の判断に使われる証拠に似ているものだ。その証拠は一般に、異なる証人からの証言や、おそらく、問題に関

連する文書やその他の「証拠物」という形をとる。これらのすべては、法律の解釈に習熟し、過去の判例に精通した法律家、特に裁判官によって評価されなければならない。しかし、法的事件は陪審員裁判でも審査され、特定の法律の専門知識がない非-専門家が、人を理解することにおける自分たちの人生経験をもって証言の信憑性とその重要性を吟味する。法医学もまた、補助的な役割を果たしうる。しかし法廷では、そのような科学的証拠も証人によって提示され、証人は自分が見出したことの信頼性と意義を説明し、弁護するよう要求される。法的な評決の証拠範囲は、確立された科学的な法則や発見に比べて、はるかに包括性に乏しい。それはひとえに、法的な事件はすべて唯一無二で、繰り返し検証することができないからである。しかし、陪審員は、被告人が「いかなる疑いの余地もなく合理的に有罪である」と判断しなければならず、社会は、実際には不確実であるにもかかわらず、そのような法的評決に頼り、時には生死にかかわる重大な問題を決定する。宗教的な問題も、同様の吟味によって決定される。それゆえ、反有神論者が「宗教的信念には証拠がない」と言うとき、それは、裁判所が日常的に検証を試みるようなタイプの証拠がないという意味ではあり得ない。多くの場合、彼らが言っているのは宗教的教義が科学によって証明されないという意味だ。その通りであることは、ほとんどの宗教信者が認めている。しかし、だからといって彼らの信仰が証拠や知識のない思い込みの信仰に変わるわけではない。科学が真の知識の唯一の源でない限り、そうなることはあり得ない。そうではなく、知る方法はたくさんあるのだ。

科学主義の野心と科学の非個性原理

それでも科学主義は根強い。おそらく大多数の人文科学の専門家は、科学主義によって引き起こされた「科学への羨望」を喜んで捨ててしまっているが、彼らを過っていると考えられる著名な作家や支持者も残っている。歴史学の分野では、巨大な歴史データベースを構築し、それを「機械学習」ツールやその他の数学的技術で分析することによって、科学的な「法則」を発見できると考える人々がいる。たとえ

ば、コネチカット大学の人口生態学者であるピーター・ターチンは、「すべての科学は数学化へのこの移行を経る」という信念を動機として、歴史研究においてこの移行を促進することを目指している¹³。ターチンの「大前提」は、「歴史社会は、物理学者や生物学者が自然の体系を研究するのに用いたと同じ方法で研究できる」¹⁴ということだ。彼は、自分の研究アプローチに「クリオダイナミクス」という造語で名づけ、その名の雑誌を創刊した。野心を持っていたのは彼だけではない。啓蒙的な認識心理学者、スティーブン・ピンカーも「暴力が減少した理由」¹⁵を分析した本を出版しており(2011年)、「データセット」と「グラフ」を裏づけとして、その減少の原因を啓蒙主義だとしている。彼は、ターチン同様、自分が人文科学に科学の方法論を適用していると考えており、専門の歴史家による自著への酷評にも臆することはない。(この二人の著者が見る歴史の全体的な流れが、互いに矛盾していることを見逃してはならない。ターチンは周期を、ピンカーは持続的な進歩を見ている)。私は、歴史学でデータベースを数学的に分析することが不適切だとは言っているのではない。そうではなく、歴史は、分析を主たる手段として理解するだけの明瞭さや再現可能性を持っていないと言っているのである。もし、科学的方法が人類の過去の研究を支配するようになれば、その結果は、私たちが現在知り、必要としているような歴史ではなく、科学的統計学の営みに墮してしまうであろう。

ノーベル賞を受賞した生物学者ジャック・モノは、自分の哲学を次のように要約している¹⁶。「科学的方法の礎は、...『真の』知識はけっして現象を最終原因、つまり<目的>、の観

点から解釈することによって得られるわけではない、と体系的に示すことにある」。彼はこのように、「真の」知識を科学と同一視することで暗黙のうちに科学主義を採っていたが、また、目的や意図の問題に取り組むよりもむしろ再現可能なメカニズムによって説明を求めるとい

科学は、「ボトム-アップ(下位から上位へ)」などと呼ばれる説明をする。つまり、世界のより複雑な側面を、科学的探究方法がより扱いやすい、複雑さの少ない構成要素で説明するのだ。

う、現代科学の決定的な性格を正しく認識してもいた。科学の説明は意図的に、そして科学は、原理上目的や行為主体を考慮から除外するため、人間性の特別な性質や価値に取り組むことができない。科学は、「ボトム-アップ(下位から上位へ)」などと呼ばれる説明をする。つまり、世界のより複雑な側面を、科学的探究方法がより扱いやすい、複雑さの少ない構成要素で説明するのだ。この取り組み方は確立した方法として力を持っている。しかし、人は行為主体

であり、その決定的な特徴は、意図を持ち、望んだ結果を達成するために目的を持って行動することである。個人の行動は、科学が要求するような再現可能性や明瞭さを持っていないので、科学は真にはこれを扱うことができない。人はしばしば意識的な思考と意図によって事象を引き起こす。それは「トップ-ダウン(上位から下位へ)」の因果関係と呼ばれるかもしれない。意図性や意味の議論を含む理性的な個人的言説は、科学を超えた領域にある。科学者は、水がやかんの中で沸騰しているのは、熱によって温度が上がり、その蒸気圧が大気圧よりも大きくなったからだと言う。これは良い説明である。しかし、お湯が沸いているのは、私が紅茶を淹れようとしているからだ、と説明する方がもっと良いし、同じくらい正しいかもしれない。これは、「ボトム-アップ」と「トップ-ダウン」の説明の違いを例証し、また、私たちが個々の人間であるために人間の思考にはトップダウンの説明が極めて一般

¹³ Graeme Wood, *The Historian who sees the future* Atlantic Magazine, Vol 326, No 5 (2020).

¹⁴ Turchin, P. and Nefedov, S. (2009), *Secular Cycles*, Princeton University Press, cited by Graeme Wood.

¹⁵ Steven Pinker, *The better angels of our nature*, (Penguin Books,

London, 2011).

¹⁶ Jacques Monod *Chance and Necessity: An Essay on the Natural Philosophy of Modern Biology* (English edition, Vintage Books, 1972).

的であることも示す。

懐疑論者に、何があれば神が存在すると確信するか聞くと、多くの場合、彼らの答えには、神の人格的な性質を示す声や意志の伝達を含む、多くの人が目撃した明らかに超自然的な出来事があげられる。神の人格性は、ほとんどの有神論的信仰の特徴としてよく知られているが、懐疑論者は一般にこの側面を否定している。結局のところ、非人格的な汎神論というのは、今日、有神論に代わる世俗的な代替案である自然主義や唯物主義にとって、ほとんど問題を引起こさない考え方なのである。しかし、もし神の人格が主要な問題であるなら、神の存在は明らかに、科学的な問題ではない。なぜなら、科学はボトム-アップの説明に焦点を当てることで、人格的な意図の問題に取り組むことを故意に避けてきたからである¹⁷。反有神論者が、神の存在には何も証拠はないと宣言するとき、それはきっと、科学的証拠のことを言っているに過ぎない。歴史的、個人的、哲学的など、その他の多くの形の証拠は、神が確かに存在することを何十億もの人々に納得させてきた。そして、正式な証明とは言えなくとも、信じるための確固たる理性的な根拠を提供している。科学自体が強力な指標として働いて、神を信じるに至った人々もいる¹⁸。しかし、科学が唯一の価値ある証拠であると考えるのは科学主義であり、科学ではない。

科学と信仰

17世紀以降の科学は、自然界に関する深遠で素晴らしい知識を獲得し、それによって社会と地球を変容させた。自然界の規則的な振る舞いを理解するために、科学は、崇拜された書物の思索的な解釈に替えて、実験的に検証された観察と曖昧性のない理論を用いるようになっていく。物理学のような成熟した科学では、近年、かつてほど基本原理が矢継ぎ早に発見されることはなくなったが、生物学など、より複雑な分野では、科学的知識の増大は目まぐるしいペースで続い

ている。かつて全く謎であった現象が、次から次へと、科学の容赦ない進歩によって解明されている。このような驚異的な知識の増大は、科学が発見できるものに限界はない、最終的には科学の能力を超えるものは何もない、との思い上がりを引き起こす。今日、物質世界には科学の理解力を永遠に超えている特徴があると考えるのは、無謀な人たちだけである。しかし、ある種の知識を科学ではないと主張することは、同じように無謀だろうか。

キリスト教のような歴史的諸宗教の信者は、神の啓示が権威をもつと考え、それらの宗教は科学の発展に大きく貢献したにもかかわらず、その権威が現代科学に直面して信用できるかどうか理解するという難題に直面する。そして、宗教的な献身は、しばしば科学の進歩の前に防衛的に退却し続けているように描かれてきた。このような状況において今日ではほとんど信用されなくなった神学的方策は、しばしば「隙間の神」と呼ばれる。これは、現在の科学的知識の空白部分を埋めるために神の存在と行動を見るものである。科学の進歩に対する宗教的防御としてのこのようなアプローチは、科学的知識が現在のペースで増大し続けるなら、結局は敗北することになる。また、この見方には神学的にも大きな問題がある。聖書は神を、私たちが目下理解していない事柄だけでなく、被造界のすべてにおいて働いているように描いているからだ。科学主義を退けることは、「隙間の神」的な議論を採ることなのだろうか。

こう問うのは正しい。科学が自然界について最終的に何を発見するかは誰も知らない。しかし、もし自然科学が本当に本論で述べたような性質のものなら、科学に備わる力では得られない形の真の知識があることになる。そしてそれは、偶発的な事実としてではなく、原理や定義の問題としてそうなのだ。人間は、クォークや電子、原子や分子、遺伝子や細胞、筋肉や臓器などの生物学的機器、そしてさらにその上位のレベルに続く構造から成っている。真の記述のレベルは、意識、合理性、さらには実に知識そのものの複雑さ

¹⁷ 人格神の存在は科学の問題ではないということは、自然神学を排除することでもなく、また、科学の発見の解釈が神の存在の証拠になることも排除しない。ただ、その解釈のステップや、実際、自然神学はそれ自体自然科学で

はないということだ。

¹⁸ たとえば、Sy Garte, *The Works of His Hands: A Scientist's Journey from Atheism to Faith*, Kregel, 2019.

へとどんどん上がっていく。これらの高次のレベルは、私たちが知っているすべてのものの住処であり、科学によって発見されたのではなく、経験した個人的な真実である。科学は確かに今後100年の間に、脳機能の物理学、化学、生物学について多くの発見をするだろう。しかし、科学が何を発見しても、自己矛盾に陥らない限り、個人的知識の真理性を否定することはできない。

自然科学の意味を変えない限り、「科学」は倫理、哲学、経済学、神学、歴史学といった分野を理解することはできない。理解するなら、かつてのサイエンティアに戻り、ここで言及されている自然科学という意味での科学に戻っているのだ。これらの分野の多くを、「自然科学」の意味を持つ科学にしようとした長い、そしてほとんど実りのない歴史はある。しかし、疑いも持たずに科学主義を信奉するのでない限り、そのようなプロセスが完了することがあり得るとなどという思い上がりを抱き続けることはできない。心理学、経済学、社会学など、データの数学的・統計学的分析から恩恵を受ける分野があることは、その反証にはならない。もし人文科学が一たとえ生物学と強いつながりを持つものであっても—純粋に科学として追求されるとしたら、それはその学問分野のしかるべき関心範囲の膨大な部分を無視するか、科学をサイエンティアに戻すかのどちらかになるだろう。宗教も、あたかも自然現象のであるかのように研究することはできる。統計的なデータを集め、その意味や意義を脇に置いて分析し、進化の優位性の観点から下から上への因果関係で真の説明がつけられると想定すれば、である。

しかし、宗教においてこのようなアプローチをすることは、他の非-科学的なテーマと同様に、私たちの理解を深めるところか、むしろ貧しくしてしまう。それは、意味や意義の問題を脇に置き、機械的な仕組みを超えるものを扱うことを一切拒否しているのだ。科学主義という誤った哲学を擁護するなら、実際、人文科学の解体という大きな代償を払うことになるだろう。

(本論は Ian Hatchinson “Understanding Science, Scientism and Resigion” ©Faraday Institute, 2021 年4月の本多峰子による全訳である。)

著者紹介



マサチューセッツ工科大学 (MIT) 原子力科学・工学科教授。プラズマ物理の専門家で、彼の研究は星の動力源である核融合反応によるエネルギーの実用化の試みの根幹をなす。

科学とキリスト教の関係について、幅広く講演を行っている。最新の著書は『科学者は奇跡を信じられるか』で、講演で学生から寄せられた多彩で厳しい質問数百に取り組んでいる

ファラデー論集(The Faraday Papers)

「ファラデー論集」は、教育と研究のための慈善団体 (www.faraday-institute.org)、ファラデー科学・宗教研究所 (Faraday Institute for Science and Religion) を出版者とする。「ファラデー論集」で表明された意見は各著者の意見であり、必ずしも本研究所の意見を代弁しているとは限らない。「ファラデー論集」は、科学と宗教の相互作用に関する幅広い論題に取り組んでいる。現在出版されている全「ファラデー論集」のリストは www.faraday.cam.ac.uk (‘Resources’) で閲覧可能であり、そこから、PDF ファイルで無料ダウンロード出来る。また、www.faraday.cam.ac.uk のオンラインショップで、1部でも、まとまった単位でも購入可能である。

2022年4月. ©The Faraday Institute for Science and Religion.